

## 看護系教育機関の教員が捉える看護学生の自立に関する文献検討

北澤 友美<sup>1</sup>、吉野 靖代<sup>2</sup>

(1. 静岡大学教育学部, 2. 駒沢女子大学看護学部)

## Nursing Faculty Members' Conceptualizations of Nursing Students' "Jiritsu": A Literature Review

Tomomi Kitazawa, Yasuyo Yoshino

## Abstract

The purpose of this study was to examine how nursing faculty members describe and conceptualize nursing students' "Jiritsu" and to summarize reported educational initiatives through a literature review. A search was conducted using the Igaku Chuo Zasshi (Ichushi) Web database for literature published up to April 2023, and 11 articles meeting the inclusion criteria were analyzed. The results indicated that the literature could be classified into five categories: classroom teaching activities, students' attitudes and learning approaches, student support systems, faculty development, and student learning. Notably, there were numerous practical reports on fostering independent learners through lectures and clinical practicums. Conversely, reports clearly defining "Jiritsu" as a shared concept among faculty members or specifying indicators and frameworks for evaluating students' "Jiritsu" were scarce. These findings suggest that the organizational foundation for positioning support for "Jiritsu" within nursing education remains insufficient. Future efforts to improve the quality of student support in nursing education institutions should focus on clarifying the concept and attainment goals of "Jiritsu," systematizing educational practices and evaluation methods, and making faculty members' educational views explicit and shared.

キーワード： 看護基礎教育 自立 教員の認識 文献検討

## 1. はじめに

看護基礎教育は、高度化・多様化する医療現場において質の高い看護を提供できる人材を育成するために不可欠なプロセスである。そのなかでも「自立した学習者」の育成は、臨床現場において、自立的に判断し、行動できる看護職を養成するうえで極めて重要な要素である。看護基礎教育では、専門的知識・技術の修得に加え、倫理観、対人関係能力、課題解決能力など、多様な能力の育成が求められるが、それらの基盤として学生の「自立」が重要であると考えられる。

青年心理学の領域では、青年の自立は、心理的・行動的・経済的な側面から親から分離し、自分の選択に責任をもって生活する過程と捉えられており、生活や将来の職業人としての在り方を含む多面的な概念とされている(山田・宮下, 2007)。看護基礎教育においても、学生が自らの状態や課題を踏まえ、自己決定と自己管理に基づいて学習・生活・将来の進路選択に取り組めるよう支援することが求められており、その基盤となる概念として「自立」を位置づけることができる。

一方で、看護基礎教育における自立の育成にはいくつかの課題が存在する。18歳人口の減少、大学教の増

加、進学率の上昇といった社会的変化により、大学生全体の学力低下が指摘されており(大村, 2008; 宇井, 2009)、これは看護基礎教育においても深刻な問題である。医療の進歩に伴い、看護師に求められる知識や技術の水準が高まっている一方で、学生の基礎学力の低下は、看護基礎教育の質を維持する上での大きな障壁となる。そのため、従来の学習内容に加えて基礎的学力の補完や多様な学生に対応した個別的な教育・指導が求められている。

現代の看護職に必要なとされる自立とは、上司や他職種の指示を待つのではなく、自ら状況を把握し、判断・行動できる能力であり、これらは学生時代からの段階的な支援を通じて培われるべきものであり、教育現場において、教員がどのような姿勢で学生と関わり、どのように自立支援を行うかは、教育効果に直結する重要な要素である。一方で、自立に関する定義や教育方法、評価基準は、教育機関ごと、さらには教員個々によって異なっており、教育の一貫性を確保するうえでの課題となっている。特に4年制看護大学においては、臨床経験を持つ教員と研究職としての経歴を持つ教員が混在しており、それぞれが有する教育観や指導方法の違いが、教育実践における方針の不統一を招きやす

いと考えられる。さらに、文部科学省が示す看護学教育モデル・コア・カリキュラム（2025）では、「臨床実習指導者の教育者としての資質・能力および看護実践者としての資質・能力を評価し保証する仕組みの整備」が必須とされており、教育者に求められる能力の多様化が進んでいる。このことは、教育現場における教育観や指導のあり方の統一や調整の必要性を喚起している。

また、看護教員のなかには、教育学的な専門訓練を十分に受けていない者も多く、学生支援に関する方針や指導の方法にばらつきがみられる。加えて、援助職に特有の共依存的な関係性（宗像，2002）が、教員と学生との間に無自覚のうちに形成されてしまうこともあり、結果としてそれが学生の自立を妨げる要因となる可能性もある。近年の看護学生は、多様な社会背景や価値観を持っており、入学時点での学力や自己管理能力にも大きな差がみられる。そのため、看護基礎教育における自立支援には、学習支援のみならず、生活指導、感情面の支援など、多角的なアプローチが必要である。学生の自立は、単にひとりのできるようになることを目指すのではなく、適切な支援を活用しながら自己決定できる状態を指すと考えられる。そのため、教員は学生の自己理解や内省を促し、自己目標の設定とその達成に向けた支援を行うことが求められ、こうした教育的関わりの積み重ねが、臨床における看護師の判断力や実践力の土台となる。

このように、看護基礎教育における自立の支援は、多義的かつ複雑な教育課題であるにもかかわらず、現状では教員の認識や教育的取り組みに関する実態が十分に整理されていない。特に、看護系教育機関における教員が看護学生の主体性を育成する経験についてまとめた文献はみられたものの（八木・伊丹・米田，2020）、より広範な概念である「自立」に対する認識や取り組みについて体系的にまとめた文献は少なく、学術的蓄積も十分とはいえない。4年制看護大学における教員の看護学生の自立に対する認識が明らかになることは、教員間で一貫性のある教育アプローチを構築する一助となり、看護基礎教育の質の向上に寄与する重要な知見となりうる。さらに、将来の看護職の臨床実践力の向上にも繋がるのが期待される。

そこで本研究では、看護基礎教育を対象として、看護系教育機関における教員が学生の「自立」をどのような教育的取り組みのなかで語っているのかを整理するとともに、文献上において「自立」という概念がどの程度明示的に定義・共有されているのかを明らかにすることを目的とした。特に、自立という概念が看護基礎教育のなかでどのように前提化され、どの程度明示的に定義・評価されているのかに着目し、教育組織における自立支援の構造的な課題を検討することを目指した。本研究は、看護基礎教育における「自立」の

位置づけとその扱われ方に焦点をあてて文献を検討するものであり、自立した学習者の育成や教員の教育観の共有に関する課題を可視化する点に特徴がある。こうした知見は、看護系教育機関にとどまらず、専門職養成を担う高等教育機関における学習指導・学生支援の在り方を検討するうえでも有用であると考えられる。

## II. 用語の定義

1. 看護系教育機関：看護師国家試験受験資格を取得することが可能であり、看護師の養成を行う学校の全てを指す。
2. 看護系教育機関における教員：主たる所属が看護系教育機関であり、看護師資格を有して学生の指導にあたる教員とし、臨床教員は含まない。
3. 自立：自分の状態や課題を踏まえて目標を立て、必要な支援を自ら選択して活用しながら、自己決定と自己管理にもとづいて学習・生活・将来の進路選択に取り組める状態を指す。本稿では、自立を看護学生支援に関する中心的な概念として扱う。文献中で用いられる「自律」「エンパワーメント」は、看護学生の自立形成に関連する近接概念として位置づける。
4. 看護基礎教育：看護師国家試験受験資格の取得を目的とした初任教育段階の看護教育を指す。本稿では、特に断らない限りこの段階の教育を「看護基礎教育」として扱う。

## III. 研究方法

### 1. 文献の抽出方法

文献の抽出は、国内看護系文献を網羅する「医学中央雑誌 Web 版（医中誌）」を用いて、2023 年 4 月 14 日までに検索可能な全年の文献を検索対象として行った。なお、本研究の体系的検索は 2023 年 4 月 14 日時点で公開されていた文献を対象として一括して実施した。

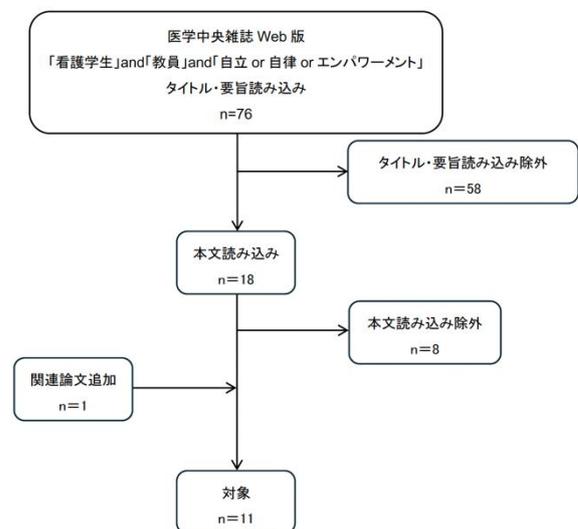


図1 対象文献の文献検索フローチャート

表1 対象文献と結果の概要

文献番号	著者名(発表年)	論文タイトル	対象・方法	分類	研究概要・結果
1	細川ら(2008)	教員が考える在宅看護実習前に学生に身につけさせたい実習態度	対象: 在宅看護実習担当教員13名 方法: 郵送法による自記式質問紙調査	学生の態度・姿勢	在宅看護実習前に身につけさせたい態度として、『対象者の生活様式・価値観にあわせた行動ができる』『信頼関係形成に向けた行動ができる』『礼節を重んじることができる』『学生自身の自立した生活ができる』『主体的に学ぶことができる』『医療人としての倫理性を遵守できる』の6カテゴリが明らかとなった。
2	冬木・峰村(2012)	看護専門学校における、新入生に対する準備教育の必要性と内容の検討	対象: 1年次学生75名、専任教員13名 方法: 自作自記式質問紙調査	学生の態度・姿勢	多くの学生が「得られている」として『コミュニケーション能力』『自己分析力』『社会人としての意識』『自主性・自律性』において、教員の9割以上が「不足している」と回答した。共通して『文章作成能力』『プレゼンテーション能力』『論理的思考力・問題発見解決力』は双方が「不足している」と回答した。
3	高村・宮本(2015a)	クラスを活用した看護学生に対する支援に関する研究【前編】支援の現状と課題	対象: 教務主任、専任教員計12名 方法: 半構成的面接、自己記入式質問紙	学生支援体制	クラスに対する学生支援として、『クラス担任制のねらい』『クラスという集団の活用法』『クラスの学生を把握する方法』『クラス担任が支援している内容・方法』『クラスに支援を行った成果』『クラスに対する学生支援の課題』の6つに分類できた。
4	高村・宮本(2015b)	クラスを活用した看護学生に対する支援に関する研究【後編】教員の役割と連携	対象: 教務主任、専任教員計12名 方法: 半構成的面接、自己記入式質問紙	学生支援体制	《クラス担任固有の役割》《クラスやクラス担任に関する教務主任の固有の役割》《クラスを支援するための教員間の連携》《クラス担任による学生支援で予測されるリスク》《クラス担任に必要な姿勢や能力》《クラス担任の能力を高めるための方策》の6つに分類できた。
5	末永ら(2016)	看護専門職として主体的に学ぶ力を育成する看護基礎教育における教育実践とその評価	対象: 科目を履修した4年生11名 方法: インタビュー調査	学生の学び	学生は「より明確な将来像が描けた」「具体的な目標を立てて行動する方法がわかった」等の学びを得ており、「目標があるとなんかやるべきかわかる」等と意味づけていた。また、「教員からのフィードバックは思考の整理に役立ち、自己評価を促す」「ポートフォリオで自己の成長プロセスが見える」等といった意義を感じていた。
6	山口ら(2017)	学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の教授活動	対象: 授業を担当している教員995名 方法: 郵送法による質問紙調査	教授活動	主体性促進を意図した教授活動として、『学生の学習過程における意思決定を促進する』『学生の内発的動機付けを高める授業を設計し展開する』『学生が自己の学習活動を評価することを支援する』など10の特徴(32カテゴリ)が明らかになった。
7	山口(2019)	学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の授業形態別教授活動	対象: 授業を担当している教員995名 方法: 郵送法による質問紙調査	教授活動	講義・演習・実習の各形態で主体性を促進する教授活動が抽出され、特に講義・演習では『学生の内発的動機付けを高める授業を設計し展開する』、実習では『学生の理解促進と思考発展を支援する』が特徴的であった。
8	梶谷(2020)	看護専門学校の新入教員が体験する教師教育の実態	対象: 新人看護教員8名 方法: 半構成的面接法、GTA分析	教員教育	新人教員の指導観は組織や他教員との関係に影響される。学生中心性が高い場合はケアリングが成立し意欲も高まるが、低い場合は指導が成立しにくい困難感を感じやすいことが示された。
9	佐藤ら(2021)	看護学実習中の学生自身による問題解決を支援する教員の教授活動	対象: 実習を担当している教員974名 方法: 郵送法による質問紙調査	教授活動	学生による問題解決を支援する活動として、『学生が遭遇している問題を具体的に理解する』『問題解決への示唆を提供する教授者との相互行為場面を設定する』など10の特徴(43カテゴリ)が明らかになった。
10	新屋(2022)	基礎看護技術への『ジグソー学習法』導入効果の検討	対象: 1年生40名、授業担当教員1名 方法: 授業分析法(FIACS)	教授活動	ジグソー学習法を導入した授業において、学生の積極的発言を意図した授業後半の生徒発言率は、教員による説明や教授が主内容である授業前半の約2倍に増加している。
11	八木ら(2022)	基礎看護学実習にのぞむ学生の主体性を育てる看護専門学校教員の経験	対象: 実習指導を行っている教員10名 方法: 半構造化面接	教授活動	教員の経験として、『教員が認識した基礎看護学を学ぶ学生のあり様』『学生の主体性を育てる工夫』『望む支援と連携』『学生との関わりで生じた思い』の4つのカテゴリが抽出された。

検索実施日以降に公表された文献については、研究デザインと分析枠組みの一貫性を保つため、追加の体系的抽出は行っていない。本研究で提示する結果は、この時点までの文献動向を反映したものとして位置づける。

検索に使用したキーワードは「看護学生」AND「教員」AND（「自立」OR「自律」OR「エンパワーメント」）である。看護基礎教育に関する文献では、学生の自立に関連する教育実践が、「自立」に限らず「自律」「エンパワーメント」などの語で表現される場合がある。そのため、本研究では、看護学生が自分の状態や課題を踏まえて自己決定・自己管理していく力を支える近接概念として「自律」「エンパワーメント」を位置づけ、自立支援に関連する教育実践を抽出し損ねないように、これらを検索語に含めた。

検索の結果、76件の文献が抽出され、タイトルと抄録を精査したうえで、研究目的との適合性に基づき58件を除外した。除外理由としては、看護学生以外を対象とするもの、臨床現場における看護職の実践のみに焦点を当て学生教育に言及していないもの、教員の具体的な教授活動や学生支援の内容が記述されておらず、教員の関与の有無や範囲が判別できないものが含まれた。本研究における「教員の関与が明確である」とは、本文中に看護系教育機関の教員による授業・演習・実習指導、または学生支援の内容が記述されていることを意味する。

その後、残る18件について本文を精読し、会議録や解説記事など本研究の選定基準を満たさない8件を除

外した。さらに、既出文献の引用文献リストおよび手作業による検索（ハンドリサーチ）によって抽出された文献1件を追加した。最終的に、分析対象として11件の文献を選定した。

## 2. 分析方法

選定された11件の文献を精読し、対象文献の概要を整理した(表1)。さらに、各文献の本文を精読したうえで、実践的アプローチと概念的理解の両面から教育の現状を評価することを意図として、教員がどのような教育的取り組みを通じて学生の自立を支援しているか、教員が学生の自立をどのように認識しているかの観点に基づいて分析を行った。この分析過程では、内容の分類の妥当性を確保するために2名の看護学研究者間で意見の一致を見るまで検討した。

## 3. 倫理的配慮

本研究は、公開されている学術文献を対象とした文献検討であるため、倫理審査の対象とはならない。ただし、著作権の遵守と情報の正確な引用を徹底し、著者の意図を損なわないよう配慮した。引用は「引用の正当な範囲」に基づいて行い、出典の明記に努めた。

## IV. 結果

本研究において分析対象とした11件の文献は、2008～2022年に報告されていた。研究デザインは、量的研究が5件(対象文献2、6、7、9、10)、質的研究が6件(対象文献1、3-5、8、11)であった。文献の内容を精査し、教育的取り組みの主たる焦点および記述の特

徴に基づいて分類した結果、授業における教授活動の報告が5件、教員が考える看護学生に必要な態度・姿勢に関する報告が2件、学生支援体制に関する報告が2件、教員への教育に関する報告、科目受講学生の学びの報告がそれぞれ1件ずつであった。なお、11件のうち、自立の定義や構成要素を明示的に提示していた文献はみられず、自立という語は教育目標として前提的に用いられていたが、その具体的な内容や評価指標はほとんど記述されていなかった。各分類における文献の概要は以下に示す。

#### 1. 授業における教授活動に関する報告

このカテゴリには、最も多い5件の文献(文献6、7、9~11)が該当した。いずれの文献においても、看護教員が学生の学習への積極的な関わりを促すことを意図して、多様な教授活動を実践していたことが記述されていた。

これらの文献では、授業形態や教育段階に応じて、学生の内発的動機づけ、理解促進、問題解決支援、行動促進などを目的とした教授活動が報告されていた。教員はそれらのアプローチを意図的に選択し、自立して学ぶ学生の育成に向けた実践を行っていたことが示されていた。

#### 2. 学生の態度・姿勢に関する教員の認識

このカテゴリには2件の文献(文献1、2)が該当した。両文献では、看護教員が教育の初期段階や実習前において、学生に求める態度や姿勢についての認識が報告されていた。

これらの文献では、教員が学生に求める基本的な態度・姿勢に対して、教員の期待と実際の学生の姿との間にギャップがあること、またそれが教育的課題として捉えられていることが記述されていた。

#### 3. 学生支援体制に関する報告

このカテゴリには2件の文献(文献3、4)が該当した。いずれも看護系養成所におけるクラス担任制または学年担当制の導入状況と、そのもとでの学生支援の実態および課題について取り上げていた。

両文献では、クラス担任制の教育的意義とその限界、ならびにそれを補完する教員間連携やチーム制の重要性が共通して指摘されていた。また、教員の役割を分担・補完しながら支援を行う体制整備の必要性も示されていた。

#### 4. 教員教育に関する報告

このカテゴリには1件の文献(文献8)が該当した。新人看護教員の教育実践の過程において、組織環境や自己認識が学生指導に与える影響が報告されていた。

当該文献では、新人教員の学生指導の質は、認知スタイルや自己認識、組織文化との相互作用のなかで形成されることが記述されており、学生が自立して学べるよう支えながらケアリングも維持できる支援環境の

必要性が示されていた。

#### 5. 科目受講学生の学びに関する報告

このカテゴリには1件の文献(文献5)が該当した。当該文献では、「看護の統合と実践 I~III」の履修を通じて、学生が得た学びやその意味づけについて質的に分析されていた。

学生は、「目標があると何をすればよいかわかる」「目標にそって評価することは自分を知ること役立つ」などと学びを意味づけており、教員からのフィードバックやポートフォリオについても、自己理解や成長の実感に資するものとして評価していたことが報告されていた。

### V. 考察

本研究では、看護系教育機関における教員が、看護学生の自立支援にどのように取り組み、どのような認識をもっているのかについて文献検討を行った。対象文献の分析を通じて、教育的実践の多様性と、それを支える教育観の幅広さが見出された一方で、自立に関する明確な定義や評価枠組みが示されておらず、自立という概念が十分に整理されないまま教育目標として運用されているという構造的な課題も明らかになった。

#### 1. 看護基礎教育の実践における自立支援の多様性と共通性

本研究で対象となった文献においては、看護教員が学生の自立を促すことを目的として、多様な教授活動や支援的関わりを実践していたことが確認された。授業形態や教育段階の違いに応じて、講義では学ぶ意欲を高めるための授業設計、演習では考えを深めるための問いかけ、実習では問題解決能力を育てるための支援など、それぞれに適したアプローチが取られていた。このように、自立支援という共通の教育目標を掲げつつも、実践の内容には多様性がみられ、教員の裁量や所属機関の教育方針等に影響を受けていることが示唆された。

一方で、支援のあり方には自立との関係性において再検討を要する側面もみられた。家庭場面では、母親の過保護的・干渉的な関わりが、青年期の子どものコーピングや精神的健康に影響することが指摘されている(坂本・香月, 2019)。この知見は、援助者が良かれと思って行う支援が、かえって本人の自己調整力やストレス対処を弱めてしまうという構造が存在し得ることを示している。教育場面においても同様に、教員が学生の困難に先回りして介入し続けることは、短期的な安心感をもたらす一方で、学生が自分で判断し試行錯誤する機会を奪い、自立の形成を阻害する危険性があると考えられる。

したがって、自立支援という枠組みは、単に学生の行動面を手厚く支えることにとどまらず、学生が自ら

状況を理解・判断し、責任をもって行動する機会を保障しつつ、そのプロセスを支える構造的な働きかけとして再定義される必要がある。教員の実践においては、何を支援するかに加えて、どこまで支援し、どこからは見守るのか、といった支援の適切なバランスや間合いを見極める視点が重要であると考えられる。

本研究の分析より、こうした支援の判断や実践を体系化するための根拠となる明確な枠組みやルーブリックは現時点では十分に示されていない現状も明らかとなった。今後の看護基礎教育実践および看護教員育成においては、自立支援の内容と範囲を理論的に整理し、それにもとづいて実践を再構築する必要があると考えられる。

## 2. 看護教員における自立の認識の曖昧さと可視化の必要性

本研究で対象とした文献の多くでは、看護教員が学生の自立を教育の目標として掲げ、その実現を目指した教授活動や支援が行われていた。しかし、それぞれの実践のなかで、自立がどのような意味をもつのか、どのような力や状態を指すのかについては、明確に記述されている文献はほとんどみられなかった。

たとえば、学生に求める姿勢として、自分で学ぶように努める、自己管理ができる、倫理観をもつなどといった内容は示されていたが、それらが自立のどの側面に相当するのかについての説明は十分ではなかった。多くの文献では、学生の自立を支援することが前提とされており、自立という言葉の意味や考え方が、教員の間で同じように共有されているものとして扱われている様子が伺えた。この背景には、自立が学習への取り組み、生活管理、感情の自己調整、対人関係など複数の側面を含む多義的な語であり、授業・実習・学生支援といった場面ごとに用いられ方が異なるため、共有概念としての定義が後回しになっている可能性がある。しかし、どの側面を重視して指導するのか、何を大切に指導を行うのか、どの程度の状態を到達目標とするのかといった前提は、本来、教員間で整理・共有されている必要がある。本研究で対象とした文献には、大学および専門学校の教育実践が含まれていたが、いずれにおいても自立の具体的な定義や、到達目標が明確に示されているとは言い難かった。特に、学生に求められる姿勢としては、自己管理や倫理観などが共通して重視されていた一方で、学生の年齢や社会経験、学びの背景には差があるにもかかわらず、教育機関の種別や特性に応じた支援の違いは十分に言語化されていなかった。たとえば、専門学校では、社会人経験を有する学生も含まれることが多く、すでに一定の生活上の自立を果たしている場合も多い。そのような学生に対しては、生活全般の自立よりも、学習習慣の再構築や、職業人としての行動形成がより強く求め

られることが予想される。

このように、教育機関によって学生の背景や学びの課題が異なる可能性を踏まえると、自立をどのように捉え、どこにゴールを設定するかは、本来、教育機関の特性に応じて異なって良いはずである。しかし、今回の対象文献ではそのような違いが十分に意識されないまま、自立という目標が一律に語られている傾向がみられた。今後は、教育機関の違いや学生の背景も視野に入れたうえで、自立の定義や到達目標をより柔軟かつ実態に即して検討する必要があると考えられる。

こうした状況をふまえると、今後の教育実践においては、看護学生の自立とはどのような要素を含むのかをさらに整理し、教員間で共通の理解を築いていく必要が求められる。また、ディプロマ・ポリシー（DP）やカリキュラム・ポリシー（CP）などにおいても自立は重要な教育目標として位置づけられていることも多いため、それを実現するための教育内容や評価の仕組みを明確にしていくことも今後の課題である。

## 3. 教員育成と教育方針共有の課題

看護学生の自立に関する定義や到達目標が必ずしも明確に共有されていない状況の背景には、教員自身の育成のされ方や教育方針の共有の不足が関係している可能性がある。本研究で対象とした文献のなかには、新人看護教員が戸惑いながら学生指導に取り組む様子や、組織の雰囲気や他の教員との関係が教育実践に大きく影響することが記述されていた。当該文献（文献8）では、学生の理解の仕方や、指導の中心に学生を置くかどうかといった違いが、教員ごとの指導スタイルや学生との関わり方に表れていた。

また、教員の意味決定のあり方や自分の判断にもとづいて行動するかという点によって、教育的困難への向き合い方や、学生指導に対する見通しにも差が生まれることが示されていた。こうした傾向からは、教員が学生の自立をどのように捉え、それをどのように支援していくかという考え方そのものが、個人の経験や置かれた環境に大きく左右されていることが推測される。

一方で、教員同士で自立に対する理解や教育方針をあらかじめ共有する場面について、文献中に具体的な記述は多くみられなかった。つまり、学生の自立をどのように育てるかについて、共通の目標や考え方にもとづいて教育を進めていくための仕組みや対話の機会が組織として十分に整っていないことが示唆される。

以上を踏まえると、今後は、教員一人ひとりの指導力を高めるだけでなく、教育組織としての方針の共有や議論を進めることが重要である。具体的には、教員間で学生の自立をどのように理解し、育てていくのかを話し合い、育成の方針をすり合わせていく場として、ファカルティ・ディベロップメント（FD）の機会をよ

り有効に活用していく必要がある。さらに、単発の研修にとどまらず、日常的な教育実践の振り返りや教員同士の対話を通じて、どのような学生を育てたいのか、という問いを共有し続けることが求められる。

これらの継続的な取り組みを通じて、教員自身が自ら学び続ける姿勢をもつことが、学生の自立支援にもつながっていくと考えられる。教員育成と教育方針の共有は、学生の学びの質を高めるだけでなく、教育の一貫性と信頼性を確保するための重要な基盤となる。

## VI. 結論

本研究では、看護系教育機関における教員の教授活動や教育的支援に関する文献を検討し、教員が学生の自立をどのように支援し、どのように認識しているのかを明らかにすることを目的とした。対象文献の分析から、教員は学生の自立を目指して授業・演習・実習や学生支援体制の工夫など、多様な教育活動を展開しており、それらに関する実践報告も多数なされていたことが確認された。

一方で、11件の対象文献のいずれにおいても、自立の定義や構成要素が明示的に提示されておらず、自立という概念は教育目標として前提的に用いられていた。看護基礎教育の文脈において、自立という重要な教育目標が明確な定義や到達目標、評価方法を欠いたまま運用されているという構造的な課題を明らかにした点に本研究の特徴がある。

今後は、教育機関や学生の背景に応じた柔軟な自立の定義づけと、教員間での共通理解の形成、さらにそれに基づく実践的な教育方針の構築が求められる。本研究の知見は、看護系教育機関における自立支援の課題にとどまらず、専門職養成を担う高等教育機関全般における学生の自立支援や教員育成のあり方を検討するうえでも一定の示唆を有すると考えられる。

## 研究の限界

本研究は、看護系教育機関における看護学生の自立に関する教育実践および教員の認識について、既存の文献をもとに分析したものである。そのため、得られた知見は文献に記述された情報にとどまり、教育現場における実際の状況や文脈を直接的に把握することはできていない。また、本研究では1つのデータベースのみに基づいて文献検索を行った。そのため対象とした情報の網羅性には限界がある。今後は、多様なデータベースを用いて幅広く文献を収集し、検討を行う必要があると考えられる。あわせて、インタビュー調査やアンケート調査などの手法も併用し、教育現場の教員の具体的な語りや実践を通じて認識の差異や多様性を明らかにする研究が求められる。なお、本研究で用いた文献検索は2023年4月14日時点で医中誌Webに収録されていた文献のみを対象としており、それ以降

に公表された文献は分析に含まれていない。そのため、本研究の知見は当該時点までの文献動向を反映したものであり、自立に関する新たな概念整理や評価枠組みを提示した近年の文献が存在する可能性は否定できない。今後は検索対象期間を更新したうえで、知見の追加・修正を行う必要がある。

## 引用文献

- 冬木佳代子・峰村淳子(2012)看護専門学校における、新入生に対する準備教育の必要性と内容の検討. 東京医科大学看護専門学校紀要, 22(1), 23-30.
- 細川満子・千葉敦子・山本春江・三津谷恵・山田典子・今敏子・工藤久子・玉懸多恵子・鈴木久美子・古川照美・桐生晶子・櫻田和子(2008)教員が考える在宅看護実習前に学生に身につけさせたい実習態度—青森県看護教育研究会地域看護学グループの取り組み—. 青森保健大雑誌, 9(2), 159-166.
- 梶谷薫(2020)看護専門学校の新人教員が体験する教師教育の実態. 第50回日本看護学論文集 看護教育, 50, 123-126.
- 文部科学省(2025)看護学教育モデル・コア・カリキュラム(令和6年度改訂版)[本文]. [https://www.mext.go.jp/content/20250317\\_mxt\\_igaku-000040938\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20250317_mxt_igaku-000040938_1.pdf)(2025年11月29日閲覧).
- 宗像恒次(2002)ヘルスカウンセリング進化論 抑うつへのアプローチ. ヘルスカウンセリング, 5, 105-109.
- 大村雄史(2008)大学生学力低下問題の構造分析. 生駒経済論叢, 6(2), 71-92.
- 坂本結美子・香月富士日(2019)看護系女子学生からみた母親の養育態度における青年期後期でのコピーング, 精神的健康との関連. 日本看護研究学会雑誌, 42(5), 5\_861-5\_870.
- 佐藤和也・松田安弘・山下暢子・服部美香・金谷悦子(2021)看護学実習中の学生自身による問題解決を支援する教員の教授活動. 群馬県立健康科学大学紀要, 16, 81-96.
- 新屋智子(2022)基礎看護技術への『ジグソー学習法』導入効果の検討～学修の主体性を発言率で測る～.(専)京都中央看護保健大学校紀要, 28, 5-18.
- 末永由里・篠木絵理・林世津子・原田竜三・小澤知子・安藤瑞穂(2016)看護専門職として主体的に学ぶ力を育成する看護基礎教育における教育実践とその評価. 東京医療保健大学紀要, 11(1), 37-44.
- 高村昌枝・宮本千津子(2015a)クラスを活用した看護学生に対する支援に関する研究【前編】支援の現状と課題. 看護展望, 40(1), 73-78.
- 高村昌枝・宮本千津子(2015b)クラスを活用した看護学生に対する支援に関する研究【後編】教員の役割と連携. 看護展望, 40(3), 80-85.

- 宇井徹雄(2009)大学生の学力低下問題とその解決策.  
オペレーションズ・リサーチ, 54(5), 243-248.
- 八木美智子・伊丹君和・米田照美(2020)学生の主体性を育てる教育における看護教員の経験に関する文献検討. 人間看護学研究, 18, 31-40.
- 八木美智子・伊丹君和・米田照美(2022)基礎看護学実習にのぞむ学生の主体性を育てる看護専門学校教員の経験. 人間看護学研究, 20, 13-24.
- 山田裕子・宮下一博(2007)青年の自立と適応に関する研究:これまでの流れと今後の展望. 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 7-12.
- 山口幸恵(2019)学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の授業形態別教授活動. 常磐看護学研究雑誌, 1, 27-36.
- 山口幸恵・松田安弘・山下暢子(2017)学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の教授活動. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 12, 17-31.